

はらぺこドレスメーカー

一九九九年太陽系第三惑星地球。  
地球と言っても『ちきゅう』と読んではいけない。地球は『ちたま』と呼ばれる星で、地球が浮いている銀河系の双子銀河にある双子星である。

## 第一章 課題の予算

とある洋裁学校に通うとある青年。  
柏原カナメは思い悩んでいた。

「どうしよう……」

課題用の布買ったら食費が……」

洋裁学校に入って一ヶ月、早速課題を作る事になったのだが、講師曰く『初めのうちは安い布よりも、ちゃんとした良い布を使いなさい』との事で、初めての制作課題は、手入れは少し難しいが縫いやすいと言う、少し高価なウール100%の布を指定されてしまったのだ。

カナメは、実家から東京に出てきて、アパートで一人暮らしをしていてバイトをしていない。

入学して初めの内は、平日授業や講義の後、バイトをすればお金に困る事も無いだろうと思っていたのだが、学校のカリキュラムがかなりみっちり詰まっているので、バイトを入れる余裕が無い。

土日祝日だけでもバイトをすれば良い様な気がするが、平日一限から六限まで、土曜日も午前中授業を受けて、更に休日まで働く体力

が無いのは自分が一番よく解っていた。  
なので、生活は親からの仕送りだけでやりくりする事になる。

更に、カナメの財布を逼迫する要因が他にもあった。  
学校の学食の値段が高いのだ。

入学後初めての授業があった日に、早速学食で食事をしようとしたら、  
具の入っていない、量が少なめのかけうどんですら三百円以上の値が  
付いていた。

それがあまりにもショックで、その日は結局学校から徒歩五分の所に  
有る牛丼屋までとぼとぼと歩いて行って、昼食を済ませたと言う経緯  
がある。

ただ、運の良い事にカナメは三兄弟の長男という立場からか、小学  
校中学年辺りから、共働きで家に居ないことがある両親の代わりに、  
頻繁に家での食事を作るのを任される事が有り、料理自体は苦手で無  
かった。

「……取り敢えず、布はもう確保したから、明日のお弁当の材料買って  
こよう」

このまま悩んでいてもどうにもならない。そう思ったカナメは一旦

考えに区切りを付ける様に、淡い色の布を二種類、大きな通学用の鞆に詰めてから、財布を持って玄関から出て行った。

近所にある回りやすい大きさのスーパーは、夜十時までの営業で、九時を過ぎた辺りからセールをやっていたり、見切り品の数が増えたりしているので重宝している。

カナメが早速見に行ったのは、野菜コーナーの端にある、見切り品が置いてある棚。

「ふむ……」

棚に置いてあるのは、少し傷のある半分には切られたゴーヤと、小さい赤ピーマンの詰め合わせ。それからパックに詰められて少ししなびたもやしと、両てのひら程有るブロッコリーだ。

それを一つ一つじっくりと見て、カナメは現在冷蔵庫の中に有る物と思ひ浮かべる。

確か卵が二個程残っていたはず。

それに、シンクの下に安売りの時に買ったツナ缶が、他にも、いつもある程度まとめ買いしている鶏胸肉が一枚解凍してあるのと、冷凍庫には

使いかけのベジタブルミックスが有るはずだ。

頭に浮かんだ食材と、目の前の食材を見比べたカナメは、見切り品の野菜を全てカゴに入れたのだった。

家に帰ってきてから、小さな台所で買ってきた野菜の処理をする。まずはもやしだ。

もやしは細かく刻んで保存用の袋に入れ、冷凍庫へ。

次に赤ピーマン。

赤ピーマンは縦半分に切り、種とヘタを取り除き、一時的に小さな鍋の中へと避難させる。

それから、冷蔵庫に入っていた鶏胸肉をサイコロ状に刻み、フードプロセッサーで粗挽きに挽く。

ミンチになった鶏胸肉をボウルに移し、パン粉と凍ったままのベジタブルミックスを適当に放り込み、しっかりと手で混ぜ合わせた物を、赤ピーマンに詰めてまな板の上に並べていく。

そこで一旦手が止まった。

「どうしよう、焼いてから冷凍した方が良いのかな？」

このまま冷凍しちゃって良いのかな？」

ハンドソープで手を洗いながら考え、焼いてから冷凍しようという結論に至る。

一口しか無いコンロの上に有る空になった鍋をどかし、小さなフッ素加工のフライパンを取り出す。

コンロに火を付け、フライパンが温まってきた所で、肉を詰めた赤ピーマンの肉側を下にしてフライパンに乗せる。

それから数分、表面が焼けるのを待ってから、シンクの下にあった料理酒を取り出しフライパンに注ぐ。

じゅわあ…… という音を料理酒が立てるなり、赤ピーマンをひっくり返していく。

そうしたら後は蓋をして火が通るのを待つだけだ。

その間にゴーヤを縦割りにし、中の種を取り出し、薄切りにする。薄切りにしたゴーヤを洗ったボウルに移し、少し多めに塩を振って水分が出るまで揉む。

それから、出てきた水分をしっかりと絞り、油を切ったツナと混ぜ合わせる。

ゴーヤとツナの和え物を保存容器に移し、また一旦ボウルを洗った後に、今度はブロッコリーに刃を入れる。

蕾の部分を一房ずつ切り分けた後、茎の部分の固い皮を切り落とし、中の柔らかい部分を取り出し、それも食べ易い大きさに切って、房と一緒にボウルに放り込む。

そうこうしている間にも赤ピーマンの肉詰めが焼き上がり、あら熱を取る為に耐熱ガラスの大きなお皿の上に並べていく。

赤ピーマンを台所と直結している奥の部屋の安全圏に避難させた後、フライパンをシンクに移す。

それから鍋を取り出して水を張り、ブイヨンのキューブとブロッコリー、それから備蓄食料として置いておいた方が良いと言われ、言われるがままに買い置きをしたあったパスタを短く折って鍋の中に放り込む。

これで本日買ってきた食材の処理は終了だ。

「ラーン、トマトも割引のやつ買ってくれば良かったかなあ」

ブロッコリーとパスタの入った鍋をかき回しながら、カナメはお腹を鳴らしたのだった。

翌朝、カナメはいつも通りに起きて早速朝食の準備を始める。

昨夜作ったゴーヤとツナの和え物を少し取り、溶いた卵と共に縁の深いフライパンで焼き、卵とじにする。

それと、乾燥わかめに乾燥椎茸を、軽くフライパンで茹でた物に少し味噌を入れて簡単な味噌汁を。

お米は昨晚炊飯器にタイマーをセットして炊いた物だ。

食べ盛りの男性としては少なめに感じる朝食だが、これ以上沢山作るのは時間が掛かるし、この量で足りないと言う事も無いので特に不満は無い。

朝食を食べ終わると、今度はお弁当の準備だ。

少し大きめな二段のお弁当箱の一段目にご飯を詰め込み、表面に薄く練り梅を塗る。

二段目には、保存容器に入れられているゴーヤとツナの和え物と、耐熱皿の上で並べて冷蔵庫に入れていた赤ピーマンの肉詰め、それと昨夜の夕食用に煮たブロッコリーの内何個か救出して置いた物を詰める。

手早くお弁当の準備をしてから、朝食で使った食器を洗い、荷物を持って学校へと向かったのだった。

午前中に行われていた一般教養の授業でヘトヘトになったカナメは、お弁当を持って学食へと向かう。

学食の中で周りを見渡しても、皆食堂のメニューを食べるか購買のパンやカップ麺を食べている。

複数人ずつのグループになって賑やかに食事をする学生が多い中、カナメは中庭に面した学食の明るい窓際の席で、一人黙々とお弁当を食べる。

服飾実習の授業中、結構おしゃべりをしている生徒が居るのだが、何故か皆一人で食事をする、所謂ぼっち飯は嫌だよなと言っていたのを思い出す。

確かに、誰かと一緒に食事をするのも楽しいけれど、カナメ個人としては一人で食事をする事に何の抵抗もない。

「んむ……」

一人でお弁当を食べ、自作のその味を吟味する。

和え物が少し塩辛かったとか、肉詰めはもう少し胡椒を振っても良かったかもしれないとか、そう言う事を考えながら食べている。

高校の時は、お弁当は忙しい中母親が用意してくれていた。味の試行錯誤を自力でする必要は無かったのだが、今は自炊だ。自力で不満のある味を改善していかなくてはならない。

自作お弁当生活を始めてから付け始めた、お弁当日記。

その日のお弁当のメニューと味加減、改善法等を食べ終わってからすぐに書き込み、家に帰る道中、電車の中で読み返している。

今日もお弁当日記を付けている訳だが、ふと過去のメニューを見返して思う。

栄養のバランスが悪いかもしれない。

しかしそうは思っても、カナメは栄養学等と言うのは高校までの家庭科の授業で教わった程度にしか解らない。

「……まあ、予算優先じゃ仕方ないかなあ」

そう呟きお弁当日記を閉じる。

お弁当箱も布でくるんで鞆に入れる。

午後は服飾基礎実習だ。

型紙のチェックは既に済んでいて布の裁断に入れる状態なので、早めに実習室に行って裁断を済ませておこうと、カナメは学食から出て行っ

た。

## 第二章 イベント

突然だが、カナメは所謂オタクだ。

高校時代には漫研に所属し、同人誌即売会などのイベントに行っては同人誌の頒布にコスプレもしていた。

普通なら気持ち悪いと言って避けられてしまう様な人間ではあったが、高校に入ってすぐに出来た友人とずっと仲が良いのと、カナメ自身の見た目が標準以上と言う事も有り、特につまはじき物にされると言う事も無く高校時代を過ごした。

そんな訳で、オタクであると言う事に全く引け目を感じていないカナメ。

高校を卒業する少し前から、同人誌系イベントに参加する頻度が少し増えた。

行きたいイベントは月に一回か二回くらいのペースで有るのだが、それら全てに参加していると、課題の布を買えないどころか食費も危うくなる。

なので、全てに参加したいのは山々なのだが、二ヶ月に一回くらいの割

合でサークル参加をしている。

イベントに参加すると、いつも隣に配置されるサークルが一つある。扱っている内容の関係で毎回隣になっている訳なのだが、人見知りしがちなカナメでも、毎回毎回隣に座られれば親しくもなる。

イベントの後、他の参加者は団体になって打ち上げに行ったりするのだが、カナメとそのお隣さんは過去に打ち上げに参加して周りと全く話が合わなかったと言う経験があるので、カナメと二人で会場近場のレストランやラーメン屋で話を咲かせている。

この日もイベントで、お隣さんと一緒にイベント会場近くのレストランでお茶をしていたのだが、ふとカナメが訊ねた。

「そう言えば美夏さん、イベント以外でも良くこの辺に来るって言うんだけど、この辺りに出やすい所に住んでるの？」

アイスティーに刺さったストローをカラカラと回しながら興味ありそうな顔をするカナメに、お隣さんこと美夏はアイスティーのグラスを両手で包み、笑顔で答える。

「うん。ここまでは電車一本で出られるわよ」  
「へえ、そうなんだ。」

僕もここまで電車一本で出られるんだよね」

そんな話も織り交ぜつつ、今回と次回以降のイベントの話もしつつ、二人は少し名残惜しそうに会計をして店を出る。

店を出るとそのまますぐ近くにある駅の入り口へと入って行き、エスカレーターを降りて改札をくぐり、ホームに入り、電車に乗る。

電車に揺られながら、カナメは隣でつり革に掴まっている人におずおずと問いかける。

「あの…… 美夏さん？」

「何？」

「美夏さん、この電車で良いの？」

「えっ？ カナメさんこそこの電車で良いの？」

「えっ？ 僕の家はこっち方面なので……」

「あら奇遇。私もこっち方面なのよ」

「そうなんだ」

よく考えたら美夏もあそこまで一本で出られる所と言っていたし、路線が同じなら途中まで同じ電車でも何らおかしくは無い。

そう思いながら二人で電車に乗り、同じ駅で降り、駅を出て同じ方面

に歩き始める。

「あの…… 美夏さん？」

「何？」

「美夏さんの家、この辺なの？」

「えっ？ カナメさんこそ家こっちの方なの？」

「えっ？ 僕の家はこの近辺なので……」

「あら奇遇。私もこの近辺なのよ」

「そうなんだ」

そうして歩く事暫く。バス通りを暫く歩き、そこから少し路地に入った所に有る、鉄筋コンクリート造りのエレベーターの付いていないアパート。ここにカナメが借りている部屋があるのだが……

「あの…… 美夏さん？」

「何？」

「美夏さんの家、ここなの？」

「えっ？ カナメさんこそ家ここなの？」

「えっ？ 僕の家はこの三階なので……」

「あら奇遇。私はここの四階なのよ」

「そ、そうなんだ」

まさか同志が近所というレベルでは無く近所に住んでいる事に、カナメは驚きを隠せない。

アパートの前で思わず戸惑っているカナメに、美夏がこんな提案を出した。

「ねえ、折角近所に住んでるんだし、今日の晩ご飯は私のうちで食べていかない？」

「ご馳走するわよ」

「え？ 良いの？」

「疲れてるからごはん用意するのも大変だろうし、だからといってへたに外食するよりは安く付くでしょ。」

もし気になるんだったら材料費を少し出してくれれば良いし」

にこにここと笑っている美夏のその言葉に、カナメのお腹がきゅると鳴く。

「それじゃあ、お言葉に甘えて」

お腹が鳴ったのが恥ずかしいのか、カナメはおなかを押さえ、少し顔を赤くしてそう答えた。

一旦荷物を自分の部屋に置いてきたカナメは、早速美夏の部屋でもてなされていた。料理が出来るまでこれでも飲んでてね。と透明なアクリルのコップで出された冷たいお茶は、紅茶の様な色では無く、柔らかな黄色をしている。

「なんだろう……」

カモミールと、レモングラスと、あと……」

カナメが穏やかな顔で香りを嗅ぎ、お茶に口を付けながら成分分析をしている間にも、台所からは油の跳ねる音と電子レンジの音が聞こえて来ている。

料理の音をBGMにお茶を飲んで待つ事暫く、美夏が二つの大皿に盛られたパスタとフォークを持って来て、テーブルに置いた。

「はい。ペロンチーノだよ」

「ペロンチーノ？」

美夏が持って来た。ペロンチーノと呼ばれたパスタは、唐辛子が入っているのは解るが、何故かもっとりとした乳成分を纏っている。

「ペペロンチーノって、もっと絶望的な物だと思ってたんだけど、これも美味しそうだなあ」

「んふふ。うちのペペロンチーノはホワイトソース入れるんだよ」

ホワイトソースが入った時点で絶望の Pasta ではない気はしたが、それはそれとして有り難く戴く事にする。

「いただきます」

美夏に軽く頭を下げてから、カナメは Pasta を食べ始める。

唐辛子でピリ辛にはなっている物の、ホワイトソースが優しく刺激を包み込んで、まろやかな味わいだ。

「ん…… どうかかな？」

黙々と食べているカナメを見て不安になったのか、美夏が少し心配そうな顔で訊ねてくる。

その声にはっとしたカナメは、口の中の Pasta を飲み込んでから笑顔で答える。

「これすごく美味しい！ 作り方知りたいな」

「本当？ よかった。」

ちなみに作り方は、普通のペペロンチーノにホワイトソース入れるだけ

よ」

「わあ、想像以上に身も蓋もなかった」

二人で話しながらパスタを食べ、料理は美夏が作ったからと言う事で、食器を洗うのはカナメがやった後、二人でまた暫く話しに花を咲かせていた。

その中でふと、カナメが不安そうな顔で美夏に訊ねた。

「ねえ、美夏さん。女の子の一人暮らしなのに男の人を部屋に入れちゃって、良かったの？」

少し視線を落としているカナメに、美夏は一口お茶を飲んでから答える。

「本当は良くないんだろうけど、カナメさんってあんまり男の人っぽく無いから大丈夫かなって思ってた」

その言葉に、カナメは顔を真っ赤にして頬に手を当てる。

「あ、ご、ごめん。気に障っちゃった？」

気まずそうな顔をする美夏に、カナメは頭を振って答えた。

「いや、気には障ってないんだけど、うん。大丈夫」

自分の頬を手のひらで軽く叩いてから、言葉を続ける。

「それなら、今度僕の部屋においでよ。

今日のお礼に何かご馳走するから」

その言葉に美夏は喜び、早速次の週末カナメの部屋で食事をするという約束をした。

そして次の週末。

カナメは土曜日も午前中は授業があるので、美夏が部屋にやってくるのは夕食時だ。

昼食は学校でお弁当を食べ、学校帰りに夕食の材料を買って帰る。

買って帰ったのは、レタス一個と少し奮発した少量パックのルッコラを二袋、それに肉厚な赤と黄色のパプリカと。オレンジ。

部屋に着くなりレタス諸々を冷蔵庫に入れ、お米を一合測って炊飯器にかける。

お急ぎモードでセットした後、プラスチックのボウルに入れたホットケーキミックスに粉末のコンソメ出汁とパルメザンチーズを入れ、牛乳と水でなめらかになるまで溶く。

それを直径が小さめで縁の少し深いフライパンに流し込み、じっくりと

焼いていく。

ホットケーキを三枚焼いた辺りで炊飯器が音楽を奏でたのでお米を耐熱ガラスの蓋付きボウルに移し、砂糖と牛乳を注いでかき混ぜ、あら熱を取らずに冷蔵庫へと入れる。

それから約十分、四枚目のホットケーキが焼けた辺りで美夏に電話をかけ、部屋に来る様に伝えた。

「いらっしやい。サラダはこれから作るから少し待っててね」

やってきた美夏を部屋の中に通し、カナメはレタスとルッコラ、薄切りのパプリカとカットしたオレンジに、オレンジの汁で作ったドレッシングをかけたものをガラスの大皿に乗せて持っていく。

本日の夕飯は、コンソメ味のホットケーキにフルーツサラダ、デザートにライスミルクだ。

「カナメさん凄い。私も見習わなきゃなあ」

美夏の言葉に、カナメは照れてしまう。

こうして、カナメと美夏は、偶にお互いの家で料理を食べる様になっていった。